キリストの賜う「愛」と「祈り」

京都キリスト召団　夏季福音特別集会　第４回集会　２０１９年８月２５日

奥田昌道

# 【見出し】

# ●すべては賜ったもの

いよいよ最後の第４回の集会に入りました。私はタイトルをすべて「キリストの賜う」というを付けました。我々のすべては、賜ったきものである。旧い我はもう主と共に十字架に付けられて死んでしまっている。そして、新しい生命をいただいた。ですから、この「キリストの賜う」というのもそういうふうに、ひとたび我々は、

「主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

と。そして新しく生まれさせていただいた。その私というものにキリストの方から無限無量にいいものを下さる。それを、

「はい、ありがとうございます」

といっていただく。すべてはきものです。私たちのすべては賜ったものであるという自覚が大事だと思います。

自然界を見ましても、太陽の恵みは悠久の昔から、地球は太陽の恵みによって生かされてきているわけです。地球の中に潜んでいる資源、石炭とか石油とか、そういったものも全部、太陽の恵みで造られている。太陽は空気を清めてくれる。そして、自然現象としての雨を降らせ、清らかな空気を私たちにいつも与えてくれる。太陽は悠久の昔から輝き続けて、生命を与えっぱなしである。地球は太陽に対して何一つご恩返しもしていない。

「天の父の全きが如く全かれ」

と、キリストが言われた。

「天の父は善き者の上にも悪しき者の上にも日を昇らせ、直き者にも直からざる者にも雨を降らせ給う。汝ら、天の父の全きが如く全かれ」

という。つまり、天の父は完璧な愛である。与えっぱなしの一方的な愛である。そういうお方の心を心とせよと。それは人間にできないことです。人間にできない。これはみなエゴがあるからです。自己保存本能があるからです。

そういうエゴ、これを聖書は別に「肉」と呼びます。自己中心的な在り方。そういう生まれながらの、いわば生き物としての我々は、自己保存本能なくして生きられない。自己保存本能でなくて、「ご飯も要りません、何も要りません」とやれば、これは枯れ木のように死んでしまいます。だから、食欲も性欲もその他いろいろな欲望というのは、生物体として生存のために必要なんです。しかし、その中に埋没していたのでは、これはまたダメなんです。だから、それを乗り越えて、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず。御霊のキリストわがうちに生き給う」

という、絶えずそういう格闘を経ながら、天の高みへと引き上げられていく。それが我々クリスチャンとしての人生ではないだろうか。そんな思いがいたします。

主と共に十字架せられたら、食欲も性欲も何もすべてなくなったら、それは死んでしまいますよ、そんなことをやったら。それはまだ早すぎますよ。向こうの天の次元、天界に行ったら、そこではもう嫁いだり娶ったりすることはないと、キリストも言っておられる。

「七人の兄弟に順番にいでいって、天国に行ったら、いったい誰の奥さんになるんですか？」

というような問答がありますが、そのときも、

「向こうの世界ではったり嫁いだり、そんなことはないんだ。そういう天使のような存在だ」

ということを言っておられます。我々は、この地上で肉体を宿としている限りは、いろんな戦いがあります。しかし、それに囚われていたのでは、全然前へ進めません。だから、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

という、その告白は、そういった肉なる自分、の自分、これは依然として存在しているんです。いくら、

「十字架でキリストが我々のために死んでくださった」

といったって、の自分というものはいつまでも残ってます、私たちは現実に。しかし、にもかかわらず、

「本当のお前はもう十字架されしまっている。本当のお前は私の生命を生きている。後を振りかえらないで、前に向かって限りなく進め」

という、進軍ラッパが鳴っている。パウロは、

「もう走るべき道のりを果たし走り終えた。あとは義の冠が私を待っている。祭壇に血を注ごうとも、何とも思わない」

というようなことをテモテへの手紙で言ってます。そういうふうな、我々は肉体を宿としていながら、しかも、それを乗り越えて、絶えず主の御力によって引き上げられて進んで行く。そんな歩みをしているのではないかということを思います。

# ●常に感謝、讃美、祈り

今日は第４回集会ということで、愛のところです。信仰、希望、愛と、この三つがいつも大事だと言われます。コリント前書13章に、

「たとえ、私が天使の言葉を語るとも、あるいは山を移すほどの信仰があっても、愛がなかったら、私は全く空しい存在だ。愛は寛容にして、愛は慈悲あり、己の利を求めず、誇らず高ぶらず」

といったことがズラズラと書かれていますね。ああいう愛のすがたです。そして、

「いつまでも残るものは、信仰と希望と愛である。なかでも最も大事なものは愛である。最高のものは愛である」

と。よく、

「キリスト教とはどういう宗教ですか」

と問われると、

「愛の宗教である。神は愛なり」

ということが言われるわけです。そういう命題として掲げたってしょうがない。我々自身がそのような姿に成りきって歩んでいくということを主は求めておられると思う。

「そんなこと難しくてできません」

なんて。それはの人間、肉なる人間はできるはずがない。しかし、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

と、キリストの方でちゃんと、

「本当のお前はもう片づいているんだよ、旧いお前は片づいてしまっているんだ。でなかったら、何のための十字架だったんだ」

と、キリストは言われますよ。

「十字架であなたの旧いあなた、自己中心のあなたは全部片づけられている。それをしっかり受けとりなさい」

「でも、私の中にまだ残っています」

「そんなことは問題ではない。見えるところによらない。見えている現象の奥に本もののあなたが光っているんだよ。それを信じていきなさい」

「はい、ありがとうございます」

と。私は「ありがとうございます」しか言葉がないというのは、そういうことなんです。見えるところがどうであろうと。それは自分についてだけではない。人さまについても言えると思うんです。ご夫婦が喧嘩するのはみんな、の相手の姿を見ているから。「こんちくしょう」とか、「この野郎」とか、「こんなやつだと思って結婚したのではなかった」とかね、まぁいろいろなことが出てくるでしょうが。でも、そういう生のエゴイストの自分ではない。それはもう既に十字架で本当は片づけられてしまっている。本当のあなた、本当の奥様、本当の旦那さん、これはもうキリストにあって全く新しくられたものである。

「旧きは過ぎ去った。視よ、一切は新しくなりたり」

と、コリント書にある。やはり、「自分が可愛くてしょうがない」という段階はダメです。

「私はもう自分がいやでいやでしょうがない。もう生の自分を見たら嫌なんだ、吐き出したい」

という、そういう自己嫌悪に陥った者に対して、

「そうじゃないよ。のお前は出来損ないかもしらんけれども、その奥に本当のピカピカ光っている素晴らしいお前をつくった。私は第二の創造をしたんだよ」

と。第一の創造、アダムの創造は失敗した。神さまから離れて、背いて。けれども、その背きを全部、キリストが十字架で引き受けて、

「われ主と共に十字架せられたり」

と。十字架せられて生きている人があったら、手を挙げてほしい。そんなのはいないですよ。十字架でキリストも死なれた。その時、我々も一緒に死んだ、殺された。だから、私は「無理心中」と言ったでしょ。自分なんかそんなこと望んでもいないのに、キリストが勝手に私を抱いて十字架で私も一緒に死なせられたんですよ。それで死にっぱなしかというと、そうではない。忽然とキリストは本当の生命を顕してくださった。

「その生命をお前にもやるよ」

と。キリストはご自分の中にあるすべて善きものを全部、我々に下さろうとしている。

# ●コリント後書４章

私が何を言いたいかというと、見える自分、見える相手、それにこだわってはダメ。その奥に本当の本ものが光っている。それを見ていきましょうと。コリント後書の４章に、

「我々は見えるものでなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからである」

と書いてましょ。

コリント後書の４章７節から、

「７我等この宝を土の器にてり、これれて大なるの我等より出でずして、神より出づることの顕れんためなり。

自分のことを「土の器」といっている。しかし、その土の器にピカピカ光っている宝がある。それは賜ったものです。

８われら四方よりを受くれどもせず、ん方つくれどもを失わず、９責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、10常にイエスの死を我らの身に負う。

これ、「主と共に十字架せらたり」と、常にイエスの死を身に負う。

これイエスの生命の我らの身にあらわれん為なり。

十字架で旧き我は死んだ。そしたら、新しいキリストのあのご復活の永遠の生命が我々の中にも芽生えている、与えられている。

11それ我ら生ける者の常にイエスのため死にさるるは、イエスの生命の我らの死ぬべき肉体にあらわれん為なり。

ひとたび死ななければ、新しい生命は芽生えてこない。ヨハネ伝12章でも、

「一粒の麦、地に落ちて死なずば一粒にてあらん。死なば多くの果を結ぶべし」

とあります。また、キリストは、

「私の弟子となりたければ、私に従って来たいと思うならば、日々己を棄て、己が十字架を負いて我に従え」

と仰っています。己に固執していたら、の自分に執着して、それを何とか保持しようとしたら、これはもうそれで行き詰まりで終わり。そういうものをかなぐり捨てて、「主さま！」と言って、キリストの中へ飛び込んでいけば、そこで旧い我はもう片づけられている。新しいキリストの生命が宿っている。そういう見えない世界での、新しい霊的な事態が展開していくんだよと。そういうふうに私は思います。

10常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命の我らの身にあらわれん為なり。

と、ハッキリ書いてある。

11それ我ら生ける者の常にイエスのため死にさるるは、

常にイエスのゆえに死にわたされている。これは本当に危機的状況ですね。それは、

イエスの生命の我らの死ぬべき肉体にあらわれん為なり。12さらば死は我等のうちに働き、生命は汝等のうちに働くなり。

今度は、「汝らのうちに生命が働く」と、そういうふうに展開していますね。そして、

14これ主イエスを甦えらせ給いし者の我等をもイエスと共に甦えらせ、汝らと共に立たしめ給うことを我ら知ればなり。

これは何かビジョンを描いて言っているのではない。

「これは霊的現実である」

と、ハッキリ確信してパウロは言っている。見える現象的な我々の生き死にということの奥に、もう既に霊的な根源現実としてキリストは永遠の生命をそこにプロデュースしてくださっている。キリストが復活されたあの永遠の生命の質はこんなものだ、ということを顕された。それにあやからさせていただいて、同質になる。イエス・キリストという方はご自分の中にあるすべてのものを与えようとなさっている。我々をイエス・キリスト以下に放っておきたくない。イエスの中に生命が働いているなら、その生命を彼らに与えたい。イエスの中に働いている、父の神の無限無量の愛、これを人々にも与えたい。

我々もそうでしょ。おいしいものをいただいたら、親しい者に「これをどうぞ、おすそわけです」と上げますね。お饅頭をもらったら、「半分どうぞ」と。ところが、子どもは人のものまで取ってしまって（笑）、自分のものは与えることはしないという、エゴ、自己中心ですけれど。本当は、愛する者に自分の持っているどんなものでも分かち与えよう、そして喜びを共にしよう、とそう思うのではありませんか。

まぁなにか、パウロの気持はそんなふうな気がするんです。

「これ主イエスを甦えらせてくださった方が、私たちをもイエスと共に甦えらせ、共に立たせてくださることを私たちは知っているからである。」

と。

15凡ての事は汝らの益なり。これ多くの人によりて御恵の増し加わり、感謝いやりて神の栄光の顕れん為なり。」（コリント後4･7～15）

私は、クリスチャンとはどういう種類の人間かというと、常に感謝、讃美、祈り、これに生きている人だと思う。感謝、讃美、祈り。詩篇なんかそうでしょ、感謝、讃美、祈りでしょ。呻きもありますよ。呻きはもう全部、キリストが引き受けてくれる。そして、呻きも感謝、讃美、祈りに変貌させてくださっている。私はそう思っています。だから、クリスチャンで、ブツブツ、ブツブツ言っているのは、まだまだ入り口以前ですよ。

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

旧い私、エゴイストの私、神さまに逆らう私、それは全部、十字架で片づいてしまった。その奥に新しいあなたがプロデュースされている。旧いアダムは死んだ。新しい第二のアダムを創りだしてくださった。それは、パウロは復活のところで言ってます。

「肉なるものでかれ、霊なるものにる。朽つるもので播かれ、朽ちないものに甦る」

私は、あの「甦る」を「変貌する」と言いたい。甦るというのは、たしかに死んでた者が息を吹き返すようなイメージですけれども、そうではない。変貌している。変化する、変貌する。肉体をまとってこられたイエスが十字架の死を突き抜けて、一端、地獄に落ちてくださって、そして、ご自分の本当の生命の質を顕された。あれが「復活」という言葉で表されている事態にすぎない。つまり、息を吹き返して元に戻るなんていうのではない。ラザロが甦ったのは、元に戻っただけです。けれども、そんなんじゃない。イエスの中に隠された本質があのように顕れてきた。それに私たちは同質的にあやからさせてくださる。それがイエス・キリストの私たちに対する捨て身のご愛だと思っています。それに、

「はい、ありがとうございます」

と。我々クリスチャンというのはそういう存在ではないんだろうかと思っている。ですから、パウロもここでは、

「16この故に我らはせず、我らが外なる人はるれども、内なる人は日々になり。」（コリント後4･16）

と言っている。私も含めてみんな、歳をとれば、いろんなところが機能しなくなってきます。後ばっかり振り返って、「あの頃は元気だった、あの頃はよかった」と（笑）、そういうことばっかり言う。そんなことではない。外なる人は破れる。生物体としては、これは当然で、しょうがない。けれども、内なる人、霊なるあなた、見えないあなた、神さまがプロデュースしてくださった第二のあなた、それは日々に新たである。これを本当に、

「ごっとさんです、ありがとうございます」

といただく。これなんです、私は。自分からは出ない。全部いただいたもの。無条件でいただいものです。

「いや、こんな不信仰な人間、こんな罪びとでも……」

「そんなことをゴチャゴチャ言うな。十字架で片づいているじゃないか。でなかったら、十字架はになるぞ。私を無駄死にさす気か、コノヤロー」

なんてぐらいの気魄でね、キリストは（笑）。そうでしょ。

十字架の死を無駄死にしたらいかん。本来、十字架で死ぬようなお方ではなかったんですよ。祈っていれば、眩い姿になって天に昇っていくようなお方でしょ。それがわざわざ、あの十字架の死を味わって、地獄のどん底まで落ちて、しかも地獄で苦しんでいるやつを抱きあげて、復活体となって栄光の姿で顕れてくださった。その栄光の姿に我々も同質的に変貌させようとなさっているんですよ。だから、神・キリストにおいて顕れた神の愛なんていうのは、本当にそういうもの凄いものなんですね。そういうものにしっかり心が捕らえられると、この世で何があろうが、そんなものは大したものではない。

ちょうど、嵐の海を弟子たちが漕ぎなやんでいた時に、キリストが波を鎮めながら歩いてこられて、

「我なり、懼るな。心安かれ！」

と言われたら、ピタッと嵐も止んだ。

「あっ、これはどういうお方なんだ!?」

と、弟子たちは驚きました。ああいう姿です。

だから、皆さんも、困難にぶつかったり何かした時に、

「主よ、あの海の荒波を踏みしめて、近づいて来てくださったあなたが、どうぞ、今、私の中に入ってください。そうすれば、私の中で今いろんな嵐があっても、そんなものはピタリと止んでしまいます。あなたは嵐にも負けないお方です」

と。それからまた、そういう荒れた海の中でキリストは船板を枕にスヤスヤと眠っておられたとある。本来そんな嵐に慣れているはずの漁師たちが、

「先生、先生、大変ですよ。我々は死にそうです。我々を犬死にさせるんですか！」

「お前たちの信仰はどこへいったんだ？」

と、キリストは言われましたね。そして、

「まれ！」

と言ったら、パッと波も風も止んだという。

「はっ、この人はどんなひとなんだ!?」

と。あの弟子たちというのは、宗教的な訓練を受けてない人でしょ、みな。だいたい、漁師さんたちですね、ペテロもヨハネもヤコブも。そういう人たちがキリストと三年間生活して、驚きの連続ではなかったかと思う。

「これはいったい、どういう人なんだ、この人は！」

と。そういった自然現象の中で自然現象に勝っていらっしゃるだけではない。あらゆる病の人を癒してもいかれるし、本当にもう千変万化するようなあのキリストの在り方というものに、弟子たちは戸惑いと驚きで、

「これは大変なひとだ！」

くらいの気持ではなかったかなと思うんですね。

小池辰雄先生は言われた、

「聖書は驚嘆驚倒して読むべき書なり。キリストの前に降参するまでは、聖書の扉は絶対に開かれませんよ」

と言われました。私たちは福音書を読むときに、そういう平伏しの気持でなかったら、「聖書を読んでやろう」とか、自分がお高いところから聖書を見下して、「ひとつ読んでやろう」なんていうのでは、絶対に開かれない。

「平伏しの心で読まなければダメだ」

と、ハッキリ言われましたね。そういうことも思うんです。

はい、あまり脱線してはダメです。

コリント後書４章に戻りまして16節、

「16この故に我らはせず、我らが外なる人はるれども、内なる人は日々になり。17それ我らが受くるくの軽き患難は、極めて大なる永遠の重き光栄を得しむるなり。18我らのみる所は見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるものはにして、見えぬものは永遠に至るなり。」（コリント後4･16～18）

この箇所は本当に素晴らしいと思います。

今日のタイトルは、「キリストに顕れし愛」なんです。ここからが本論になるんですが。この「愛」ということに関しては――私は今回、皆さんに宿題を出しました。祈りに関する箇所をずっと拾いあげてきてくださいと――自分もやってみました。私は、マタイ伝を中心にまずやってみて、そしてそれが他のマルコ伝、ルカ伝、あるいはヨハネ伝ではどうだということで、そういう表を作って、皆さんにお配りしました。

今度は、この集会が終わってから、皆さんがなさるお仕事として、「愛」というものが出てくる箇所を旧約から新約に至るまで拾いあげてみてください。これは大変だと思いますよ。たとえば、「神は愛なり」というのもそうでしょ。新約聖書だけでも大変ですよ。それを旧約までれば、これはもう本当に大変な仕事だと思いますけれども。やはり、

「神は愛なり」

これがキリスト教の本質かもしれませんね、世間的にいいますと。その愛が十字架に極まったわけですから。

そういう点で、「信、望、愛、祈り」と、昨日書いたんです。信は、過去の十字架を中心とした、そういった過去のものを現在化していく。望は、将来的な約束を現在に引き寄せて現在化していく。愛は何かというと、常に上から現在、無限無量に注がれてくる。これが愛だ。だから、信・愛・望は過去・現在・未来ということになって、それらを支えているのは、引き寄せていくのは祈りだ。祈りを支えてくれているのは御言だ。そして、御言を支えているのは御霊だと。私はそんなイメージをいだいているんです。

ヨハネ伝14章以下で、

「聖霊、助け主、真理の御霊が、イエスのお姿が見えなくなったあと、あなた方と常に共にあって、あなた方を常に導いていく」

と、そういうふうに約束なさいました。「聖霊、助け主、真理の御霊」、そういうことがヨハネ伝14章から16章のところに出てきます。

そういったキリストの約束は全部、成就したんですよね。福音書を読むときに、その時点へ戻って、「ああ、これから起こるんですか」なんていうのではなくて、もう既に起こってしまっている。約束されたことは既にもう実現してしまっている。そういう思いで受けとっていただきたいなと、私は思います。

それで、そういう「愛」に関するところをこれから少し拾いあげていこうと思います。多すぎて困ると思うんですけれども、その中で非常に大事なところを、気づいたところを拾いあげていこうと思います。

# ●ローマ書５章、コリント後書11章

ローマ書に愛のことが何度か出てきますので、まずそこから見ていきます。それも飛ばして落としているかもしれませんけれども、気づいたところからいいますと、ローマ書第５章。４章までは、

「信仰によって義とされる」

ということを諄々と説いてきて、そして、５章にいきますと、

「１斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、

自分の立派な行いとか、そんなものではない。ただイエス・キリストを無条件に受け入れる。それが信仰です。キリストを無条件に「はい」と言って受けとる。そういう「信仰によって義とせられる」というのは、神さまが我々をお受け入れくださっている。だから、

我らの主イエス・キリストに頼り、神に対して平和を得たり。

主イエス・キリストのゆえに。何もかもキリストが我々のためにやってくださった。そのお方によって今、神さまとの関係は、緊張関係はもうなくなっている。キリスト抜きで神さまと対面してごらん。それは義なる神さまの前に、不義なる罪なる我々が立てるはずがない。吹っ飛びますよ、それは。それをキリストは避雷針になって、神の落雷を全部引き受けて、そして、私たちに愛をながしてくださったわけでしょ。だから、神さまとの間はもう敵対関係はなくなっている。

２また彼により信仰によりて、今立つところのに入ることを得、神の栄光を望みて喜ぶなり。

そういう無条件に神さまの愛を受けとるという、そういう姿が信仰ですよね。そういう姿によって今立っているところの恵みの中へと引きずり込んでいただいた。

３然のみならず患難をも喜ぶ、

のみならず、神さまの栄光を望んで喜んでいる。しかのみならず患難をも喜ぶと。

そは患難は忍耐を生じ、４忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。」（ロマ5･1～4）

クリスチャンというのは、どんな目にあっても、全然へこたれない。

「倒さるれども滅びず」

とパウロは言いました。

パウロの苦難というものは大変なものだ。たとえば、パウロが自分のことを述べているのはコリント後書――自分はペテロとか他のキリストの直弟子たちに使徒として、アポステルとして引けをとらないんだと。パウロのことをとやかく批判する連中がいることに対して、パウロは弁明している――そこのところがコリント後書11章の22節から、

「22彼らヘブル人なるか、我も然り、彼らイスラエル人なるか、我も然り、彼らアブラハムのなるか、我も然り。23彼らキリストのなるか、

キリストに仕えるそういう役者なるか、

われ狂える如く言う、我はなおれり。わが労は更におおく、に入れられしこと更に多く、うたれしこと更にしく、死にみたりしことなりき。

「クリスチャンなら、何もい目にあわない」と思ったら、大間違いですね。パウロさんがいいお手本です。

「どんな目に遭おうともびくともしない。何となれば、キリストわれを愛し給うがゆえなり」

と、そうやって突き抜けなければ、クリスチャンでないですよ。御利益信仰ですよ、そんなものは。私はいつもモデルはパウロだと思っています。

私は全然、獄にも入れられたことも、鞭打たれたこともありません。楽なもんですわ。

死にみたりしことなりき。

それもありません。

24ユダヤ人より四十に一つ足らぬ鞭を受けしこと五度、25にて打たれしこと三たび、

「」というのは金属の鉄片が、鉄のみたいなものが付いている。それでをやっつける。それで打たれたら、肉がられてしまう。そういうもので打たれたのが三回。

石にて打たれしこと一たび、破船に遭いしこと三度にして、

伝道旅行をやってました時にそうだったんでしょうね。

一昼夜海にありき。26しばしば旅行して河の難、盜賊の難、同族の難、異邦人の難、市中の難、荒野の難、海上の難、偽兄弟の難にあい、

私はこれを読んだ時に、なぜ、キリストはこんな酷い目にあわされるのだろうか。キリストがお遣わしになる、キリストが愛してやまないパウロなら、もうちょっとパウロのことを守ってあげたらいいのになと、何度も思いました。キリストがパウロを召された時に、

「私のためにあんたがどんない目にあうか、どんな苦しみにあうか、それをよくよく心得ておきなさい」

と、そういうふうなことを言っておられます。それから、何度かパウロに現れて、

「がんばるんだよ」

と、エルサレムへ行こうとしているその旅路の中で激励もなさっていますしね。こうやって、パウロはこれだけの患難にあっているんです。

27労し、苦しみ、しばしば眠らず、飢え渇き、しばしば断食し、凍え、裸なりき。

私はこんな目にあったことは絶対にありません。断食すらしたことがない。飯を忘れたことはありますけれども。気がついたら、飯食ってなかったなんてのはありますけれども、自分から進んで断食なんてしたことがない。だから、パウロさんに比べたら、私なんてもう楽なヌクヌクの生活ですわ。

28ここに挙げざる事もあるに、なお日々われに迫る諸教会の心労あり。

教会が分裂を起こしたり、仲間割れ、喧嘩、そういう異端が入り込んでガタガタになっている。そういうのが全部、パウロの耳に入ってくる。そのためにパウロは苦しんでいる。「ああ、行ってやるよ」なんて、すぐ行けないじゃないですか、当時の時代に。今だと、新幹線でパーッと東京まで３時間で行けるけどもさ、昔は行けませんよね。そういうのがパウロの心の痛みになっているわけです。

29誰か弱りて我弱らざらんや、誰か躓きて我燃えざらんや。

ある兄弟が躓いて、あらぬ道に行こうとしている。信仰が弱っている。それがやはり自分の痛みになるという、そういう思いでいるわけですね。

30もし誇るべくは、我が弱き所につきて誇らん。」（コリント後11･22～30）

パウロは誇り高きパウロですけれども、そういうことを言ってます。自分のことを、

「一つだけやはり誇りたいことがあるんだよ」

と、「第三の天に引き上げられた」ということを言ってます。それは肉体を離れて行ったのか、肉体のままで行ったのか、それは知らない。けれども、その第三の天へ行って、普通ひとが見てはならないような凄い光景を見せられた。それを誇りとして自分が高ぶることのないように、が一つ与えられた。刺を退けてくださいと三度お願いしたけれども、それは聴いていただけなかったという。

「９言いたもう『わがなんじに足れり、わがは弱きうちに全うせらるればなり』さればキリストの能力の我をわんために、ろ大に喜びて我がを誇らん。

これは慰め深い言葉ですよね。クリスチャンはみんなかというと、そうじゃない。肉体的にも弱いひと、精神的にも弱いひと、いろんな人がいっぱいいる。けれども、

「そんなものは大丈夫だ。全部、キリストが背負ってくださっているから大丈夫だ。自分を見ないで、常にキリスト讃美、それで貫こう」

と。そういう励ましだと思います。

10この故に我はキリストの為に・・・迫害・に遭うことを喜ぶ、そは我よわき時に強ければなり。

患難、迫害、苦難、そんなものに出会っている。それをあえて喜ぶよと。なぜなら、我よわき時に強ければなりと。クリスチャンで、「私は強い、私は強い」と言っているのはあぶない。我々の側から見たら、「あの人は強い人だな」と思っても、本人は決してそう思っていないんだろうと思う。パウロは、自分は現実にはいわゆるアポステルたち、キリストの直弟子たちに決して劣らないと思っているけれども、しかし、それを誇ったりはしない。

12我は徴と不思議と能力ある業とを行い、大なる忍耐を用いて汝等のうちに使徒の徴をなせり」（コリント後12･9～12）

我は徴と不思議と能力ある業を行った。大なる忍耐を用いてあなた方のうちにアポステルとしての徴を成就した。それは事実だと。そんなことを言っております。

それから、さっきローマ書５章を読みました。ローマ書５章から脱線してしまいました。

「５希望は恥をらせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛われらの心に注げばなり。

ここが大事ですね。我らに賜いたる聖霊において、神の愛が私たちの心に注がれている。

今日のタイトルは「愛」ですから。

６我等のなお弱かりし時、キリスト定まりたる日に及びて、ならぬ者のために死に給えり。７それ義人のために死ぬるものどなし、仁者のためには死ぬることをわぬ者もやあらん。

義人のために死ぬやつはまずいないだろうと。人間は義人が嫌いなんです。けれども、情け深いやつには心を寄せる。だから、情け深い人のためには、相手のために死のうという人もいるかもしれない。

８然れど我等がなおたりし時、キリスト我等のために死に給いしに由りて、神は我らに対する愛をあらわし給えり。

されど我らがなお罪びとたりし時、キリストさまが私たちのために死んでくださった。そこに神の愛が顕れた。十字架に顕れし神の愛ということ。十字架が神の愛の、我々に対する愛の極致であるということです。

９斯く今その血に頼りて我ら義とせられたらんには、まして彼によりて怒りより救われざらんや。10我等もし敵たりしときの死にりて神と和らぐことを得たらんには、まして和らぎて後その生命によりて救われざらんや。11然のみならず今われらにを得させ給える我らの主イエス・キリストに頼りて神を喜ぶなり。」（ロマ5･5～11）

そのようにして、十字架がある以上、もう私たちは神さまとの間に敵対関係はない。そこで和らぎが、和睦が成立している。神さまに敵対していたときでさえ、ご自分の側から十字架を指し示して、キリストが全部、我々のきを引き受けてくださった。それが成就して、神さまとの関係が仲直りできた。そしたら、いよいよ神さまの愛が我々に注がれて当然ではないかと。神さまを喜ぶ存在にされた。

本当に私はキリストに抱かれて初めて、神さまに対するれがなくなったですよ。それまではやはり旧約を読んだりしても、神さまは恐いんです。ちょっとでも間違ったことをやったら、バシッとやられてますね。本当にそう思いませんか？　だから、旧約聖書を読むのが恐かったんです、実は。ところが、このキリストにおいてすべてがもう引き受けられている。だから、キリストから離れられないです。しかも、このお方は、すべてのことを全部成し遂げて、

「わが愛に居れ」

と、言ってくださっているわけでしょ。

「父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり。わが愛に居れ」

「人その友のために己が生命を棄つる、それより大いなる愛はなし」

と。友どころか敵対している我々のために生命を棄ててくださったわけですから。

# ●ペテロ前書１章

それから、ペテロ前書をちょっと引いておきましょう。これはペテロの書を受けている相手方に対して非常に激励している、励ましを与えているような、そういう文章です。ペテロ前書１章３節から読んでみます。

「３むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、その大なるにい、イエス・キリストの死人の中より甦えり給えることに由り、我らを新たに生まれしめて生ける望みを懐かせ、４汝らの為に天に蓄えある、朽ちず汚れずまざるを継がしめ給えり。５汝らは終りのときに顕れんとて備りたる救いを得んために、信仰によりて神の力に護らるるなり。」（ペテロ前1･ 3～5 ）

究極的な救い、新天新地の到来とか、最後の審判とか――十字架は過去の事実ですけれども――将来、本当の救いの完成の時がやってくるという。宇宙の完成といいましょうかね、何かそういうものを展望して、その時にいわば救いが完成する。そのために今は、神の力に護られている。それも、「信仰により」と書いてます。恵みを恵みとして無条件に受けとっている姿、それが信仰です。何かを無理やり信じ込むのではないですよ。恵みを恵みとして無条件に、「ありがとうございます」といって受けとっている姿を第三者から見たら、「あの人は信仰があるな」と、こういうことなんです。ですから、自分で「信仰があります」なんて、そんなことは全然思う必要はない。

「ありがとうございます。恵みを感謝します」

と、受けとっておれば、それでいい。そうすると、そういう人は神の力に護られている。だから、あなた方はこれからいろんな迫害、試練に襲われるだろう。でも、にもかかわらず、あなた方は大いに喜んでいるねと。喜んでいないクリスチャンというのはおかしい。

「本当にキリストのことがありがたい。キリストの十字架がありがたい。キリストがやってくださったことは本当に素晴らしい。天上天下キリスト以外のもの凄いものはない」

というくらいの気持でなかったら、本当の意味のまだクリスチャンではないんですね。

このペテロの相手方は、誰が相手方かというと、第１章の初めに、

「１イエス・キリストの使徒ペテロ、書をポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ピテニヤに散りて宿れる者、

離散のキリスト者たち、

２即ち父なる神のめ知り給うところにいて、御霊のめによりならんため、

御霊の潔めをいただいて、神の御言に、神さまに柔順であるために、

イエス・キリストの血のを受けんために選ばれたる者に贈る。

イエス・キリストのあの十字架の血潮を注がれた、そして選ばれた、そういう者たちに以下の手紙を贈りますと、言っているわけです。だから、いわば異邦人たちです。

６この故に汝ら今しばしの程さまざまの試煉によりて憂えざるを得ずとも、なおに喜べり。

その異邦人たちに対して、

「あなた方は神の御力で護られている。だからこそ、これからもなおいろんな試練が訪れるだろう、また心配事もあるだろう。にもかかわらず、あなた方は大いに喜んでいる。普通の人が喜べる状況で喜んでいるのではない。普通の人ならとうてい喜べない状況でもなおあなた方は喜んでいる。これが勝利の徴だよ」

と、そんなくらいの気持です。そして、

７汝らの信仰のは、つる金の火にためさるるよりも貴くして、イエス・キリストの現れ給うとき誉れと光栄ととを得べきなり。

あなた方の信仰は今、いろいろ試されている。試練に立たされている。それはちょうど、金が練られて純金に仕上げられていくように、あなた方は試練のの中で鍛え上げられていくんだ。そして、イエス・キリストが現れてくださる時に誉れと光栄と尊きを得べきであると。次です、

８汝らイエスを見しことなけれど之を愛し、今見ざれども之を信じて、

あなた方はイエスを見たことはない。そうですよね、イエスを見たことはない。けれども、そのお方を愛し、今見てないけれども、そのお方を信じて、

言いがたく、かつ光栄あるをもて喜ぶ。

言葉で説明できないくらいの喜びに輝いている。そういう姿をここで描いています。だから、私は、クリスチャンが、ここで言われているような、こんな姿であってほしいんですよ。どんな状況の人もなお、このように感謝と喜びと讃美にあふれている。

「こんなことをしてもらったから、私はうれしい」

とか、

「してくれないから、私はあかん」

とか、そういった出来事、現象、運命、環境、そんなもので揺さぶられているあいだは、まだまだだと思っています。何があろうと突き抜けているパウロの姿。さっきのローマ書８章の最後の所にありますね、

「患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。何が来ようとびくともしない。キリスト・イエスにある神の愛から我らを引き離すものは何ひとつない」（ロマ8･35～39）

という。この愛の勝利の絶叫。これがクリスチャンの姿だと、私はそう思っています。

このペテロの手紙の相手方もそうなんですね。あなた方は本当にいろんな試練にあって、普通の人ならやりきれない。その中でもなお大いに喜んでいる。あたかも純金が仕上げられていくプロセスのように、試練を通してあなた方は鍛え上げられ、潔められ、完成されていくという。そして、イエスを見たことはない。でも、その方を愛している。今は見てないけれども、これを信じている。言い難く、光栄ある喜びをもって喜ぶ。

９これ信仰の、すなわちの救いを受くるにる。」（ペテロ前1･1～9）

肉体はどうせ朽ち果てる。肉体にったらダメなんです。「病気が治った、治らなかった」と、そんなことで一喜一憂していたら、おかしいと思います。何があろうとも突き抜けて、キリストはご自分の愛を現してくださっている。御霊を下さっている。それでいいじゃないかと。

「己を救わんと思うものはこれを失い、わがため、福音のため己を棄ててかかる者はのを得る」

とハッキリ、キリストは約束しておられる。それがペテロの手紙の始めのところです。

# ●ローマ書８章

そして、ローマ書８章はもう本当に素晴らしい愛の凱歌をあげていますので、そこも確認しておきます。

ローマ書８章というのは、信仰、希望、愛、それが見事に描かれているんです。始めの１節からだいたい17節くらいまでは、肉なる思い、霊なる思い。肉なるの我、それからキリストにある霊的な新しくせられた新しい人。そういった関係、いわゆる霊の次元と肉の次元、そういうものの対立関係です。律法というものは、肉に働きかけても、何の役にも立たなかった。本来、律法というものは霊的なものだ。それが肉なる人間存在は、律法には耐えられないといった、そういうことをずっと書いています。

キリストは正に、我々肉なる存在が神の求めに応えられなかったものを、ご自分の肉体において神の審きを受けて、我々を霊の思いの人間に変貌させてくださる。そういうことを言っているように思います。そういう、

「イエス・キリストの中に在る者は罪に定められない」

これを小池先生は、

「今やキリスト・イエスの中に在らしめられて在る者は罪に定められない」

と、こうふうに読まれた。ナチュラルに当然にあるような、そんなことではない。在らしめられて在る。

「本当の意味で、キリストの中に在る、なんていうことは、我々自身にはできない。在らしめられて在るんだよ、ありがとうございますと受けとる」

つまり、受け身なんです、こっちは。みんなキリストの愛の業が、キリストの中に抱きとられることすらも、キリストの愛の業によって捕まえられて、そして、キリストの中に在らしめられて在る。その者はもはや断罪されることはありえない。なんとなれば、このお方の中には、「生命の御霊の法」が働いている。の自分の中には、「罪と死の法」が働いている。それで、心の中では善を願い、御意を思っても、現実の自分というのはその正反対な自分だと。

24噫われ悩める人なるかな、此の死のより我を救わん者は誰ぞ。

「ああ、誰か此の死の体から救ってくれるものはあるのか」

という嘆きを７章の終わりに述べて、

25我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す」

と言って、そして８章で、

「１この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。

この故に今やキリスト・イエスの中に在らしめて在る者はもはや断罪されることはない。

２キリスト・イエスに在るののは、なんじを罪と死との法よりしたればなり。

なんとなれば、このイエス・キリストの中に働いている生命の御霊の法が、旧い我々の中に巣くっていた、我々を縛っていた、あの罪と死の法から完全に解放してくださった。十字架で完全に片づけられた。

「旧き我は既に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず、復活のキリスト、御霊のキリスト、わがうちにありて生き給うなり」

という、その事態ですね。それをここで言っている。

およそ律法は、神の御意として聖なる律法が、肉なる人間に突きつけられても、それを果たしようがない。のままの人間が、神の要求に応えるなんてそもそもできっこないと、そういうことを言っている。

キリストがご自分の肉において、そういった背きの罪、エゴイズム、そんなものを全部引き受けて死んでくださったと。

「生命の御霊の法があなた方を罪と死の法から解き放った」

と。

３肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は為し給えり、

なぜならば、肉によって、肉のゆえに、律法が願っている神の御意が実現できない。それをキリストが代わって実現してくださった。

即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のためにし、肉に於て罪を定めたまえり。

すなわち、己の御子を罪ある肉の形、我々と同じ姿で世につかわして、そしてそのキリストの御体、肉の姿において断罪をなさった、罪をそれに背負わされた。その目的は何か。

４これ肉に従わず霊に従いて歩む我らの中に、の義のうせられん為なり。

もはや肉に従わないで霊に従って歩む新しい私たちに、もともと律法が願っていた神の御意――御意が成就されている姿が義です――その律法が願っていた義、それは肉なる我々においては不可能だった。それを実現してくださった。それが目的であった。そして、

５肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。６肉のは死なり、霊の念は生命なり、平安なり。

我々は霊の次元に新しく産み出された人間。だから、霊の次元の人として、我々は胸を張って生きていくんです。それには十字架を土台にしなければならない。

「われ既に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

と。旧き我は死にました。そして新しい生命をいただきました。その新しい私たちは霊に従う者であって、生命であり平安であると。

７肉のは神に逆う、それは神のにわず、したがうことわず、

肉の思いは神に逆らっている。それはそもそも神の御意を実現するなんて不可能なんだ。そういうことを言ってます。

８また肉に居る者は神をばすこと能わざるなり。９れど神のなんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん、キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

肉にある者は神を喜ばすことはできない。しかしながら、神の御霊があなた方のうちに宿っていらっしゃる以上は、あなた方はもう既に肉なる人ではない。霊なる人に変貌されている。変貌せしめられてしまっているんだと。そう読みたい。しかも次のところに、

10しキリスト汝らにさば、は罪によりて死にたる者なれど、霊は義によりてに在らん。

キリストが、御霊のキリストがあなたの中に宿ってくださっておれば、体はこれはもう死に定められてしょうがない。でも、その体は死に定められていても、肉体は滅びても、霊は神さまの世界へ羽ばたいていく。霊は義によりて生命に在ると。そして、

11しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて、汝らの死ぬべきをも活かし給わん。

あのキリストを生命に変貌させられた、あの御霊があなた方の中に宿っているならば、

「あなた方のうちに宿り給う御霊によりて、死ぬべき体を活かし給う」

と書いてある。だから、我々の肉体はどうせ死ぬんです。けれども、死ぬべき肉体にありながら、なにか聖霊というお方が宿ってくださると、違う生き方をしてくる。なにか活き活きと生きてくる。そういう印象を受けるんですね、ここを読みますと。

12されば兄弟よ、われらはあれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて活くべきにあらず。13汝等もし肉に従いて活きなば、死なん。もし霊によりて体のを殺さば活くべし。14すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。

そして、霊によって、今の御霊によって、肉のエゴイスティックなものをえこんでいく、そうしたら、あなた方は生きることができる。なぜなら、御霊に導かれている者は神の子だからと。

15汝らは再びをくためにたる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父と呼ぶなり。

そして、我々は僕の霊をもう棄てた。僕というのは絶えずビクビクしているんです。鞭打たれはしないかと、平安が絶対にない。それに対して、我々は子としての霊――子は少々失敗したって、ちゃんと許してもらえる。鞭打たれることはないんですね、どうも──我々は子たる霊を受けた。そして、「アッバー、父よ」と呼ぶんだと。しかも、

16みずから我らの霊とともに我らが神の子たることをす。17もし子たらばたらん、神のにしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリストとともに栄光を受けん為に、そのをも共に受くるに因る。

御霊みずから私たちの霊と一緒に、私たちが神の子であるよと証明してくださる。神の子ならば、天国を受け継ぐキリストと共同の相続人である。共同の相続人であるならば、当然、苦しみも共にするんだと。そういうことを言う。そして、

18われ思うに、今の時のは、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。19それ造られたる者は、切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。20造られたるもののに服せしは、己がによるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。21然れどなお造られたる者にもの僕たるより解かれて、神の子たちの光栄の自由に入るはれり。22我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。

今のときの苦しみはやがて顕れようとする栄光にくらぶるに足らずという。現状は、自然界も含め我々人間もまだまだ今は過渡期でありますから、いろんな苦しみがある。それは仕方がない。そういうことをずっと言っている。

23然のみならず、御霊のの実をもつ我らも自ら心のうちに嘆きて、子とせられんこと、即ちおのが体のわれんことを待つなり。24我らはによりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところをでなお望まんや。25我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

我らはそういう望みをいただいて救われているんだと。望みというのは将来のことで、まだ実現していない。しかし、忍耐強くその実現を待っている。そういうことを言って、そして、26節からは、

26斯くのごとくも我らのを助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き歎き（呻き）をもてし給う。27また人の心を極めたもう者は御霊のをも知りたもう。

我々はどう祈っていいかわからないけれども、御霊言い難いきをもって執り成してくださっている。神さまは御霊の思いを知り給う。そして、召されたる者のためには万事が結局プラスになる。そういう非常に積極的な約束がここにあります。

御霊は神のにいて聖徒のためにし給えばなり。28神を愛する者、すなわちによりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。

によって召されたる者には、万事が互いに働いてプラスとなっていく。なんと積極的な言い方なんでしょうか。楽天的な。そうでしょ。

私は、キリストのところにくるまでは、本当にペシミストでした。「今はよくても、どうせまた悪くなるわ」と。とにかくマイナスにしかものを考えなかった。「今はお天気でも、どうせ雨になるわ」と、そんなふうにもうネガティブにしか考えられなかった。そんな人間に喜びが湧き上がるはずがない。目が覚めたら、「ああ、また一日が始まる。しんどいなぁ」と、そこから始っていく。それがキリストによって創り変えられたら、逆転しましたね、本当に。ありがたいことでした。そして、そういったことを述べてきて、

31ればの事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。

神さまが私たちの味方なんだ。いったいそれに敵対するものがあろうかと。

32己のを惜しまずして我らのためにし給いし者は、などか之にそえてを我らにわざらんや。

己の御子を惜しまずして私たちすべてのために十字架に渡してくださった方は、我々に栄光の体を与えてくださるに止まらない、万物を与え給う。そして、もう今や、キリストの執り成しがあるから、何が起ころうと、キリストはかばい給う、守り給う。

33誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。34誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右にして、我らの為に執成し給うなり。

あの十字架の上でも、

「彼らをしてやってください。彼らは自分のやっていることがわからないからです」

と言って執り成された。敵対している者のためにも、そうやって祈られた。ましてや、キリストに贖われて、キリストを主と呼んでいる我々をキリストがかばわれないはずがない。いや、聖霊となって私たち一人ひとりの中に宿り、またそばにくっついて、我々をただしき道に導き給うという、そういう思いがしております。

35我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、か、か、迫害か、か、裸か、か、か。

これはさっきパウロの患難を全部、拾いあげましたように、全部、パウロは自分で体験した。しかし、何が来ようと、

「キリストにおける神の愛から私を引き離すものは、天上天下何一つない」

と。それを高らかに勝利宣言していますね。

36して『汝のために我らは、ころされてらるべき羊の如きものとせられたり』とあるが如し。37されどてこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者にり、勝ち得て余りあり。38われく信ず、死もも、

相対的な死、相対的な生命も、そんなものも、

も、権威ある者も、

これは霊的な存在者、

今ある者も後あらん者も、

これから来ようとする者も、

力ある者も、39高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」（ロマ8･1～39）

我らの主キリスト・イエスにある神の愛から、我らを引き離すことは絶対に不可能であるという、この勝利宣言。これを我々は絶えず心に言い聞かせて、

「そうだ、何が来ようと、キリスト・イエスにおける神の愛。キリスト・イエスにおいて示された神さまのご愛、それは私たちを護って、護って、護りぬく。相対的次元で何が起ころうと、宇宙がひっくり返ろうと、天地がひっくり返ろうと、そんなことはどうでも、そんなことは関係ないんだ」

と、そういう本当に開き直りの勝利宣言。これをして行かないと申し訳ないと思います。

# ●ヨハネ第一書２～４章

それから次に、ヨハネ第一の手紙を開いていただきたいと思います。だいたい、ヨハネの手紙は「永遠の生命」のことを語り、そして、

「神の愛は、を信ずる者を一人も滅びないで永遠の生命を得る。終わりの時に甦る。これが神さまのだ」

ということを繰り返し書かれています。そのためには、

「我をくらえ、我を飲め。私と本当に一つになれ。人を活かすものは霊であって、肉は役立たない」

という。霊というのは神さまから来るものです。肉というのは自分から出るものです、ナチュラルなものです。ナチュラルな人間アダムではダメで、第二のアダム、天から新しく与えられた、霊的存在者、それに成れと。そのためにキリストは十字架にかかって道をいてくださった。

「我は道なり、真理なり、生命なり。この私を通らなければ、天の次元、神の次元、父の御許には行けないよ。狭い門、細き道だ。しかし、そこをあなた方は突き進んで生きなさい」

ということを、

「狭き門より入れ」

ということで言っておられます。

そういう道を拓いてくださったその神の愛のことを、ヨハネ第一の手紙が繰り返しうったえていますので、そのポイントだけ拾っていこうと思います。

第２章のところでは、兄弟を愛しあう、兄弟姉妹が互いに愛しあう。それが実現していなかったら、まだまだそれは本当の意味で神の愛を受けていることにはならないということを言います。２章８節から、

「８……の光すでに照りて、はややに過ぎ去ればなり。９光に在りと言いて其の兄弟を憎むものは、今もなお暗黒にあるなり。10その兄弟を愛する者は、光に居りてそのになし。11その兄弟を憎む者は暗黒にあり、暗きうちを歩みて己が往くところを知らず、これ暗黒はその眼をしたればなり」

真の光すでに照りて、暗黒はとっくに過ぎ去ってしまった。光の中に在りといって兄弟を憎んでいる人はまだ暗黒の中に止まっている。兄弟を愛する者は、光の中に居りて躓きはない。兄弟を憎む者は暗黒の中に止まっている。しかも、暗黒の中を歩んで自分でどこへ往くのかそれも分からない、目が見えない、そういう状況にあるということを言います。それらから15節、

15なんじら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、を愛する愛そのになし。16おおよそ世にあるもの、

この「世」というのはどういうものかというと、

即ち肉の、の慾、の誇りなどは、御父より出づるにあらず、世より出づるなり。

こんなものをあげている。だから、この世で尊ばれている、財産、名誉、その他さまざまなものがありますね、人が心かれていくようなもの。そんなものに振り回されるのではないよと。そういうものを越えた、本当のものに目を注ぎなさいと。そう言っているのだと思います。肉の慾、眼の慾、所有の誇り、それは神さまから出ていない。世から出ている。エゴイストの世から出ている。そんなものに心を誘われるようではダメだよと。

17世と世の慾とは過ぎ往く、されど神のをおこなう者はに在るなり。

世と世の慾とは過ぎ往く、されど神の御意をおこなう者は永遠に留まるなりと。こういう生き方が本当の生き方である、ということを言ってます。

それから、もうひとつ大事なことは、聖霊の油そそぎ。神の御言、神の御意を本当に知らせてくれるのは御霊なんだ。人ではない。聖霊があなた方を導いて行くんだよ、ということを言ってます。27節、

27なんじらのには、主より注がれたる油とどまる故に、人の汝らに物を教うる要なし。

「主より注がれたる油」とは聖霊です。それがとどまっているが故に、人さまからいろんなことを教えてもらう必要はない。つまり、人間の知恵、そんなものによる必要はない。

此の油は汝らにての事を教え、かつにしてなし、汝等はその教えしごとく主に居るなり。

この聖霊という油があなたに必要なことをすべて教えてくださるからと。そういうことをここで言ってます。

それからヨハネ第一の３章。これはあなた方はいったいどういうものであるか、ということを高らかに宣言しているところです。

「１視よ、父の我らに賜いし愛の如何に大なるかを。我ら神の子と称えらる。既に神の子たり、

すでに神の子であると。

世の我らを知らぬは、父を知らぬによりてなり。２愛する者よ、我等いま神の子たり、後いかん、未だ顕れず、

我らはいま既に神の子である。では将来どうなっていくのか、それはまだわからない。まだ顕れていない。

主の現れたもう時われら之にんことを知る。我らそののを見るべければなり。

主の現れたもう時それとそっくりさんに変貌する、と書いてある。われらは之に似た姿になる。なぜなら、その真の姿を見る。キリストの真の姿を見たら、それと同じそっくりさんに我々も変貌させられていく。ありがたいことが書かれてますね、ここに。

３凡て主による此のをく者は、その清きがごとく己を潔くす。

希望というのはまだ実現していませんからね、将来実現する。それを懐いている者は、やはり主の心を大切にする。主が清くあられるように自分たちも潔くありたいと、そういうふうに生きていくはずだと。それから、９節へいきますと、

９凡て神より生るる者は罪を行わず、

すべて神より生まれる者は罪を行わない。なぜなら、

神の種、そのにまるに由る。彼は神より生るる故に罪を犯すこと能わず。

聖霊がその人の中に留まっているからである。大胆にそういうことまで宣言されてます。

それから、兄弟姉妹が互いに愛しあいなさいということが言われて、13節、

13兄弟よ、世は汝らを憎むともしむな。14われら兄弟を愛するによりて、死より生命に移りしを知る、

もう既にあなたの中には永遠の生命が宿っている。肉体の生き死に、そんな問題ではないよと。愛せぬ者は死のうちに居る。

15おおよそ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者なり、凡そ人を殺す者の、その内に永遠の生命なきを汝らは知る。

愛を知らない人、愛しない人はまだ霊的には死の中に留まっている。おおよそ兄弟を憎む者は即ち人殺しだと。その中には永遠の生命なんか絶対にありえない。そして、16節、

16主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」（ヨハネ一3･1～16）

これは本当に素晴らしい言葉です。

「主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり」

と。愛というのは決して感情的な、なにか「好きだよ、愛しているよ、チュー」なんていう、そんなレベルではないよと。

生命を棄ててくださった。しかも、神に逆らっている罪びとなる我々のために、聖なる神の子キリストが──祈っていれば眩い姿で天へ昇っていくお方──その栄光を棄てて、我々のマイナスを全部ひっかぶって、そして我々に、本来キリストがいただかれるべき生命を私たちにまず下さった。そういうお方を神さまの側で放っておくはずがない。キリストを素晴らしい姿にまた変貌させられ給うた。まずは、ご自分を我々罪びとのために犠牲として献げてくださった。十字架に顕れしイエス・キリストの愛。それをお認めになった父なる神の愛。

キリストが十字架にご自分をおかけになって、我々のために死んでくださった、キリストの愛。これはみんな分かります。けれども、それを望まれた父なる神。これはどんなに大変かと思うんですよ。おおよそ親が、自分の子どもがそういうったらしい死に方をせねばならない、それを「えへへ、よかったね」なんて、そんな親がどこにいるかという。子どもが苦しむということは、それ以上に親が苦しんでいる。しかし、それをあえてしなけば、人々は救われない。

「済まんけれども、死んでくれ」

というのが、それがゲッセマネの祈りのお答えだと思うんです。

「なんで私があなたから引き離されて、地獄へ落ちる。暗黒の中に行かねばならないんですか。私は今までちっともあなたのにいたことがありません。あなたと私はいつも一つでした。それをなにゆえに、私は引き裂かれて、あなたのいない世界、味わったことのない世界へ、私が突き落とされなければならないんですか」

と。そういうふうに私はあのゲッセマネの祈りを受けとっている。未だイエスが味わったことのないような世界へ今、突き落とされようとなさっている。しかも、イエスの側には何の理由もないんです。

理由があれば、「わかりました。仕方がありません」と。それは我々が言う言葉です。我々はどんなに神さまから審かれようと、何の言い逃れもできない。

「義人なし、一人だになし」

とは、みんなエゴイストだ、みんな背いている。「神を信じている」なんていっても、自分の幸せのために信じているだけ。神さまを利用しているだけなんです。

「神の故に、神の栄光のゆえに」

なんて、そんなことは誰も祈らない。クリスチャンとえども、そうです。でも、キリストは神さまが一切です。

「父よ、汝の御意が天に成るごとく、地にも、この身を通して成らしてください」

と、始めっから自分を献げきっておられる。これが義という姿でしょ。また、父なる神の愛に応えておられる。義と愛とが一つになっている。それが今、引き裂かれて地獄に突き落とされようとなさっている。

「なぜなんですか？」

と、当然、イエスが祈られるのは当たり前だと私は思っているんです。けれども、応えはない。そこで、

「わかりました。御意に従います」

と。立ち上がって、あの十字架を背負って、ゴルゴタの丘を行かれた。それを本当に冥想するだけで涙が出ますよね。

なぜ、あのお方があんな苦しみをお受けにならねばならなかったんですか。それと自分とは関係ないと思ってきたんです、今までは東洋人として私は。あんなものはヨーロッパの宗教だと。ところが、どっこい実は、あの十字架においてご自分を棄てられた、あのご愛によって、私は無条件に神の子にされた。道を開いてくださった。

「我は道なり、真理なり、生命なり。私を通らなければ、誰も父の御許、永遠の世界には行けない」

「ありがとうございました」

と。だから、私は、キリストさまの前にはもうを垂れるだけ。何一つ文句を言うことはありません。どんな運命環境にこれから襲われるかわかりませんけれども、そんなことはどうでもいい。

「主よ、あなたにおいて顕れた神さまのご愛だけを私は訴え続けていきます」

と、そんな気持です。もうあと余命いくばくもありませんけれども、私はそういう思いでおります。皆さんはどうですか。「自分、自分、自分」で動いてほしくないですね、私は。

「主さま、あなたの御意だけが大事です。あなたの御意がこの私を通し、、を通して、どうぞ、地に成ってください。この地はなおあなたを拒んでいます。あなたに逆らっています。しかし、その果ては滅びです。あなたは、それに耐えられないといって嘆かれました。どうぞ、その嘆きを共にしながら、あなたの祈りを祈りとさせてください。自分自身がどうなろうと、そんなことはもうどうでもいいんです。主よ、どうぞ、あなたと一つにならせてください」

と。そういうふうな思いで私はいます。皆さんはきっと、

「まぁ先生くらいな歳になったら、そうなるよな。まだ早すぎるよな」

なんて（笑）、そうじゃないんですよ。明日の命があるかどうか誰も保証してませんよ。そうでしょ。だから、

「に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」（論語）

という言葉があります。本当のものに触れたら、もうそれで、

「アーメン、ハレルヤ！　いつでもこの身を、生命をお取り下さっても結構です」

という、そのくらいの気持です。

日本人は武士道というものを尊びました。稲造さんは、武士道というものを尊んで、そしてその延長上にキリストを持ってくるという。内村鑑三もそうでした。そうなったら、一本、筋が通っている。単なる御利益とか、いいことばっかりが伴うから信ずるとか、そんなレベルではない。

キリストご自身が、

「父よ、汝のが天に成るがごとく、この地にも成らしめたまえ、この私を通して」

と、まず自分を献げきっておられますね。クリスチャンというのは己をキリストに献げきっている姿、それで生きる者です。

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるあらず」

これを本当に日々生きていく。その者を神さまの方で放っておくはずがない。ご自分の僕としてお用いくださるんです。

「僕としてお用いください」

と立候補するやつが少ないらしいんですね、どうも。神さまの側から言うと。

だから、我々は本当にキリスト道を生きる者、それは自分の幸せとか、そんなものにもう執着しない。

「どうぞ、あなたのをわがとして、あなたと本当に一つになって生きる者としてください。どうぞ、この身を通して、あなたの御意が、あなたのご愛が人々に流れていきますように。そして、人々が本当の意味で救われますように。この身をお用いください」

と、そうやって献げているのがクリスチャンではないでしょうかね。

もう一度、ヨハネの手紙第一の３章に戻りますと、

「16主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。

そして具体的には、

17世のをもちて兄弟のを見、つての心を閉づる者は、いかで神の愛そのにあらんや。

金銀財宝を持ちながら、兄弟が経済的に困っている。それに対して憐れみの意を閉じる。そんなものは全く神さまのご愛とは無関係で、無縁な人間だと。だから、口先だけで愛するのではなくて、行いと真実をもってやろうじゃないかと、呼びかけています。

18よ、われら言と舌とをもて愛することなく、ととを以てすべし。19之に由りて我ら真理より出でしを知り、且われらの心われらを責むとも神の前に心を安んずべし。

これによって私たちは真理から出ていることを知る。そしてまた、私たちの心が良心のめがなくなり、そうすると神さまの前に平安に居ることができる。しかも、

20神は我らの心よりもにして一切のことを知り給えばなり。21愛する者よ、我らが心みずから責むる所なくば、神に向いてなし。

神さまは私たちの心よりもはるかに大いなるお方である。一切のことを知ってくださっている。神さまの前にやましいことがないならば、神に対してれがない。しかも、

22且すべて求むる所を神より受くべし。是そのを守りて御心にかなう所を行えばなり。23その誡命はこれなり、即ち我ら神の子イエス・キリストの名を信じ、その命じ給いしごとく互に愛すべきことなり。24神の誡命を守る者は神に居り、神もまた彼に居給う。我らその賜うところの御霊に由りて其の我らに居給うことを知るなり。」（ヨハネ一3･16～24）

これは全部、本当のことですね。こういう言葉に触れて、

「これはちょっとレベルが高すぎて、ダメですわ」

とか、そんなことを思わないでください。こういう素晴らしい次元の中に私たちを抱き取ろうとしてくださっている。ありがとうございますと。もはや、自分なんか見ない。

「主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり」

ということが、またその次に出てきます。

ヨハネ第一の４章にいきます。

「１愛する者よ、ての霊を信ずな、その霊の神より出づるか否かを試みよ。多くの預言者世に出でたればなり。２そイエス・キリストの肉体にて来り給いしことを言いあらわす霊は神より出づ、なんじら之によりて神の御霊を知るべし。３イエスを言い表さぬ霊は神より出でしにあらず、これは非キリストの霊なり。……之によりて真理の霊との霊とを知る。

それから大事なことは次の７節からです。

７愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、神より生まれ神を知るなり。８愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。９神の愛われらに顕れたり。神はその生み給えるを世にし、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。10愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子をして我らの罪のためにのなし給いし是なり。

「の」なんていうと、なんか神さまがかんかんになって怒っているから、それをめるために何か犠牲の献げ物をするという。それは我々にはあまりピンと来ない思想だと思いますけれども。我々のために犠牲の血を流してくださった、罪を贖ってくださった。このように十字架において神の愛は顕れたんだと。十字架がなかったら、私たちはいつまでも神さまと敵対関係にある。「アバ、父よ」なんて呼べない。その妨げを全部、十字架で片づけてくださった。

「我は道なり、真理なり、生命なり。我は門なり」

と、そうやってキリストが本当に開いてくださった。その大道を私たちは平伏し歩んで行くという、そういうことなんです。

11愛する者よ、斯くのごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがいに相愛すべし。12未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらにし、その愛も亦われらに全うせらる。13神、御霊を賜いしにりて、我ら神に居り神われらに居給うことを知る。14又われら父のその子をして世のとなし給いしを見て、そのをなすなり。15凡そイエスを神の子と言いあらわす者は、神かれに居り、かれ神に居る。

おおよそイエスを神の子と言いあらわす者は、その人の中に神さまは居てくださる。その人は神さまの中に居る。「われ主の中に、主わがうちに」と。ここでは「神」と書いていますけれども、我々は「キリスト」です。キリストさまの中に宿れば、そこが神のであります。

「われ主の中に、主わがうちに」

と。小池先生の雑誌は『エン・クリスト』です。それは、われ「主の中に」と、それを表しているのがあの『エン・クリスト』という雑誌の名前です。

そのような神さまの愛をしっかり受けとれば、神の審判なんて全然恐くない。そして、私たちは主のように、主の御意を生きて貫いて行くからである。

18愛にはなし、全き愛は懼を除く、懼にはあればなり。るる者は、愛いまだからず。」（ヨハネ一4･1～18）

と。

# ●コリント前書13章

最後に、コリント前書13章を開いて終わりとしたいと思います。

とかく、宗教家というのは、

「自分は宗教的にこれだけの行を積んできた」

とか、あるいは、

「自分にはこんな賜物がある。異言の賜物、預言の賜物、病を癒す賜物」

とか。いろんなそういった現象面で人に見せて誇りとするような、それを拠り所として、

「だから、私の信ずる神さまを信じなさいよ」

ということがありがちなんですが、そういうことに対してパウロは、

「ノー、そうじゃない」

と言っているのが、このコリント前13章だと思うんです。12章では、賜物のことをさんざん言っている。それぞれに必要に応じて賜物を与えておられる。しかし、それに囚われてはいかんと。それが13章です。

「１たとい我もろもろのの言およびの言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響くの如し。

もしも私に愛がなかったら、それは何の意味もないと。

２われ預言するあり、又すべての奥義と凡ての知識とに達し、また山を移すほどのなる信仰ありとも、愛なくば数うるに足らず。

大いなる信仰があろうと、もしも愛がなければ、そんなものは問題じゃない。

３たとい我わが財産をことごとく施し、

いかにも愛がありそうなわざですね。

又わがを焼かるる為にすとも、愛なくば我に益なし。

あるいは焼身自殺までやってみせる。そんなことをやろうと、もしもそれが本当の愛から出ていなければ、全く無意味だと。では、愛とはどういう姿か、というのが４節から、

４愛は寛容にして慈悲あり。愛はまず、愛は誇らず、らず、５非礼を行わず、己の利を求めず、

この「己の利を求めず」が最も大事だと思いますね。

らず、人の悪をわず、６不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、７そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり。

忍びき、信じ貫き、望み貫き、耐え貫くという。貫く。だから、目の前の出来事によって、現象によって一喜一憂しない。そういう姿だと思う。忍び貫き――あるいは荷い貫きといってもいい――信じ貫き、望み貫き、耐え貫く。

８愛はまでも絶ゆることなし。然れど預言はれ、は止み、知識もまた廃らん。

預言だとか、異言だとか、その他のものはみな一時的なものである。必要に応じて神の方から与えてくださる。それは永遠のものではない。しかし、本当のものは、今述べました、信仰と望みと愛。これは最後に出てきますね、13節に。

13げに信仰とと愛と此の三つの者は限りなくらん、而して其のうち最もなるは愛なり。」（コリント前13･1～13）

「キリスト教はどんな宗教ですか？」

と聞かれたら、

「愛の宗教である」

と、そういう答えがきっと一番ふさわしいのかと思います。しかし、その愛というのは、感情的な愛する愛ではない。

「神さまが御子キリストを我々のために遣わして、御子の犠牲の十字架の死によって私たちを神の子に仕立てあげてくださった。変貌させてくださった。そういう御子の犠牲の上に成り立っている愛である」

ということ。そういうことをしっかりと心に刻んでおきたい。その御子をいただいていたら、我々はどんな目にあいましても、それで神をんだり、いたりということはあり得ないと思っています。御子キリストにおいてれし神の愛、これがすべてをっていく。私はそういうふうに日々、思って生きています。自分がどんなに出来損ないでも、そんなことは問題にしない。これが十字架です。

「あなたが自分でブツブツ言っている嫌な自分は全部、十字架で片づけた。あなたを新しいものにり変えた。だから、私を信じて一緒に生きていこう。天の高みへ昇っていこう」

と。そういう非常に積極的な面があるということ。悟り澄ましとか、諦め――めとは明かに見るということ――明かに見たら、希望はありません、この世というのは。そういうのじゃなくて、神さまがご用意くださっている素晴らしい霊の次元の御国、その御国に向かって旅をしていく。そして、たくさんの方々を一緒に連れて行くという、そういう旅路を私たちはキリストのゆえに歩まされているのではないか。そして、日々、感謝、讃美、祈り。それが私の願っている在り方です。

はい、それでは、これで終わりといたします。しばらく、黙祷をお願いいたします。

# ●祈り

主イエス・キリストさま、金曜日の夜から今に至るまで、二泊三日のこの特別集会をあなたが豊かに祝福してくださいまして、あなたを慕うお一人お一人をここに呼び集め、そしてこの所において御霊、御言を、一つとして、一体として、我々にお与えくださり、

「われ生くれば、汝も生くべし」

と、主さまがあの栄光のお姿で顕れてくださった、ご復活のすがた、それに私たち一人ひとりもあずからせ、そして、昇りゆく世界は、先は、神さまの輝かしい天国であると。この世の次元でない、霊の次元、その次元に私たちを導いてくださっていることを、我々は信じ感謝いたします。

主さま、見ゆるところにあらず、見えぬものに目をそそぐ。見ゆるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからであると。本当に聖書は、福音書といい、またパウロ、あるいはヨハネ、ペテロの手紙といい、本当にこの永遠の世界のことを、真理の世界のことを、我々に開示してくださっていますことを感謝いたします。

「天地は過ぎゆかん、されど、わが言は永遠に過ぎ行くことなし。我は今日も、明日も次の日も進み行くべし」

と、盛んなる主イエス・キリストさまのお姿、これが私たちを引っ張って行ってくださいますから、感謝でございます。

主さま、あなたの下さった希望、喜び、平安そして愛。こうしたものを、どうぞ、私たちの身近な所にいる方々に、お互いに分かち与え、分かち合い、そして共に御名を讃える、そういう神の民としてくださるように、私たち一人ひとりをお用いくださるように、いります。

また、この世において本当に病める方、悩んでいる方が多いです。身近な所にもいます。どうぞ、そのそばにあって執り成し、祈り、あなたの愛の御意がその方々において成就していくように、ひたすら執り成しの祈りをなさしめてくださるように、お願いいたします。

一切のことを感謝して、主イエス・キリストの御名を通し、この讃美と祈りと感謝を御前にお捧げいたします。アーメン。